G.オーウェル『1984年』について
――「監視社会」と「自由」の視点から――

南　谷　覺　正
情報文化研究室

On George Orwell's *Nineteen Eighty-Four*
― From the Perspective of the "Surveillance Society" and "Liberty" ―

Akimasa MINAMITANI
Information and Culture

群馬大学社会情報学部研究論集
第20巻　119～138頁
2013年２月28日

JOURNAL OF SOCIAL AND INFORMATION STUDIES
No. 20　　pp. 119―138
Faculty of Social and Information Studies
Gunma University
Maebashi, Japan
February 28, 2013

G．オーウェル『1984年』について
――「監視社会」と「自由」の視点から――

南　谷　覺　正
情報文化研究室

On George Orwell's *Nineteen Eighty-Four*
―― From the Perspective of the "Surveillance Society" and "Liberty" ――

Akimasa MINAMITANI
Information and Culture

Abstract

This essay is an attempt to reevaluate George Orwell's *1984* from the perspective of the "surveillance society" and "liberty." The characteristics of the totalitarian regime of "Oceania," the country where the protagonist works for the Party presided over by "Big Brother," are examined to support the argument that most of them could emerge even in a democracy. The study also discusses the significance of *1984* in the history of dystopian literature.

キーワード：ジョージ・オーウェル，『1984年』，監視社会，自由

1．はじめに

本論は，別稿「管理･監視社会における『自由』と『平等』」（『群馬大学社会情報学部研究論集』第20巻所収）に提示した視点から，ジョージ・オーウェルの『1984年』を再検討しようとした試みである。（テキストは，*The Complete Works of George Orwell, Vol. IX, Nineteen Eighty-Four*（Secker & Warburg, 1987）に基づいた。本稿の引用部に示してある頁数は，この版のものである。）

2．『1984年』の概要

2．1．『1984年』の執筆の背景

『1984年』が出版されたのは1949年であるが，周知のように最終稿を書き上げたのが1948年であったため，その下２ケタの４と８を入れ換えて現在のタイトルとされた。(最初に予定していた仮題は「最後のヨーロッパ人」であったが，出版時に，出版社との協議で「1984年」が選ばれた。)

執筆した主要な場所は，ジュラ島（スコットランド西岸沖）という，当時の人口300人ほどの，風光明媚ではあるが辺鄙な島の北端から少し南東に下ったところにある，湾を見晴らすバーンヒル荘という農家(借家)においてであった。オーウェルは，1946年５月23日からここに住み始めるのだが，*Walden* のような孤絶した生活ではなく，養子のリチャード（当時２歳）と独身の妹アヴリルが同居しており，またイギリス本土から訪問客がかなり頻繁に出入りしていて，ある程度の社交生活を送りながらの執筆であった。オーウェルは釣りを好み，また狩猟も嗜むため（このあたりは，彼のアッパー・ミドルクラス的なところである)，ロンドンの喧騒を離れて，静かな環境で執筆に専念したかったためだと推測される。しかしもう１つの目的は，自給自足に近いような生活を送ってみることだったかもしれない。ロビンソン・クルーソーばりの，自然の中で何とかやりくりして生きるような生活を，恰もその不便を楽しむかのように試みている。(もしオーウェルが長生き出来ていたとすれば，この体験も文学作品に反映されたに違いない。）一例として1946年５月24日の日記から引くと――

> 菜園を掘り起こし始めた。つまり芝生を切り取ったのだ。なんとも骨の折れる仕事だ。土は骨のように乾き切っているだけではなく，非常に石に近い。昨夜，小雨が降ったにもかかわらず。かなりの部分を掘り起こしたなら，すぐにサラダ用野菜を植えよう。今年の秋は，できれば，灌木，大黄，果樹を植えよう。しかし，鹿を入れないためには，非常に高くて丈夫なフェンスが必要だろう。夕暮れに一匹の兎を狙って撃ったが，当たらなかった。(以下，略)[1]

そのようにして周囲の環境に馴染んだ後の８月，1945年６月25日頃から書き始めていた『1984年』の執筆を再開している。10月９日にロンドンに一時帰るためにジュラ島を発った時には，下書きが50頁ほど出来ていたとされる。その時には11月にジュラ島に戻ってくる予定だったようだが，日記を見ると次に戻ってきたのは1947年１月２日で，しかも短い滞在となった。その冬のイギリスは異常寒波に見舞われ，ロンドンに釘付けになる他はなかったであろう。オーウェルはその時までには売れっ子のエッセイストになっており，ジャーナリズムに各種の記事を執筆しながら，厳寒の冬を，労働党政権下で国有化されていた石炭産業の生産計画が滞って石炭の供給が不足したため，暖炉で古ベッド，リチャードの玩具，本までも燃やしながら何とか凌いでいる。

待ちわびた春が来ると，４月10日にロンドンを発ち，翌日ジュラ島に到着，天候に恵まれたその夏に『1984年』を書き継いで，10月末，入念な推敲とタイプ清書によって第一稿を仕上げる。痼疾化し

ていた肺の調子が悪く，相当な苦しみを冒しての執筆であった。仕上げた直後に寝込んでしまい，喀血，12月24日にグラスゴーの病院に入院し，左肺浸潤と診断される。当時，結核の特効薬としてストレプトマイシンがアメリカで使われ始めており，グラスゴーの医師はそれを取り寄せてオーウェルに投与した。強い副作用はあったものの，一定の効果はあったようで，1948年７月に退院できたオーウェルは再びジュラ島に帰り，『1984年』の第二稿を11月に書き上げた。しかし判読の難しい手書き原稿であったため，タイピストを呼び寄せて清書を依頼しようとしたのだがあいにく適任者が見つからず，オーウェルは寝ているベッドから起き出してはタイプライターを打ち，苦しくなったら再びベッドに戻るというやり方で，タイプ清書を１人でやり終え――これが彼の寿命を縮めたに相違ないとされている――完成原稿を12月初めに出版社に送っている。そして1949年が明けるとジュラ島を発ち，1月６日，イギリス本土，グロスター州のサナトリウムに入院，以後病勢が快方に向かうことはなく，1950年１月21日，スイスのサナトリウムへ移ろうとする直前，まだ46歳という若さで急死した。

『1984年』は，1949年６月８日に Secker & Warburg 社（ロンドン）から，またアメリカでは６月13日に Hartcourt Brace 社（ニューヨーク）から出版され，政治を扱った文学としては異例の売れ行きを示した。今日までの総売り上げ数は１千万部を超えていると言われ，現代文学の古典としての位置を占め，全体主義や監視社会についての論考では，『1984年』に言及するのが１つの儀礼になっている感すらある。“Big Brother”は普通名詞となり，Orwellian という形容詞も人口に膾炙している。

『動物農場』（1945）と『1984年』（1949）は，元来１つの大きなテーマの下に構想された trilogy から派生して誕生したものであり，強く相関している――前者が「プロレタリア革命とその裏切り」なら，後者は「革命後」ということになろう――が，両作品の間には，オーウェルの人生にとっても，また世界にとっても，大きな節目となる出来事が幾つか挟まっている。オーウェルの人生においては，1936年に結婚し連れ添ってくれた妻のアイリーン（Eileen）が，1945年３月29日に手術のための麻酔ショックで急死（享年39歳）したことが何と言っても重い出来事であっただろう。アイリーンは文学的にも才能豊かな女性で，『動物農場』は，オーウェルがベッドでアイリーンに原稿を読み聞かせ，彼女の意見を聞きながら書き進めていっており，もしアイリーンが亡くなっていなければ，『1984年』もかなり違ったものになっていた可能性は少なくない。悲しみは踵を接するようにオーウェルを訪い，1946年５月３日に，姉のマージョリー（Marjorie）が亡くなる。またもともと良くなかったオーウェル自身の健康も，1945年の３月以降は，万一のことも考えざるを得ないほどに悪化していた。そして上述したように，ロンドンを離れてジュラ島へ移住したことも大きな変化であっただろう。社会的な出来事としては，広島，長崎への原爆投下，第二次大戦の終結，ナチの強制収容所の事実の暴露，そして冷戦の深刻化ということが，『1984年』に深く関わってくる。

ただ，こうした個人的な不幸や歴史的事件から『1984年』が着想されたわけではない。周知のように『1984年』が最初に構想されたのは1943年であるという，オーウェル自身の書簡の中での証言があり，事実でもないことを軽率に書いたりするオーウェルではないので，それは信じてよいであろうし，また第二次大戦中に書かれたものと判定されている「最後のヨーロッパ人」のメモも残っていて，そ

れは，後述するように，『1984年』とほぼ重なる道具立てや筋書きを持っている。

2．2．『1984年』の受容――反共プロパガンダ文学から近代ディストピア文学へ――

オーウェルの『動物農場』は，戦後の日本において，GHQによって許可された最初の翻訳出版（1949年5月刊・永島啓輔訳『アニマル・ファーム』）であるという興味深い歴史的事実がある。米ソのいわゆる冷戦は，ポツダム会談のときにはすでにその萌芽を見せていたが，「鉄のカーテン」演説（1946年3月），トルーマン・ドクトリン（1947年3月），マーシャル・プラン（1947年6月），コミンフォルム結成（1947年10月），ベルリン封鎖（1948年6月），ドイツ分割（1949年5月）と，自由陣営と共産陣営の亀裂は徐々に深まりを見せていく。1949年には中国共産党の率いる中華人民共和国が誕生し，資本主義世界に動揺を与えた。また1947年からは，捕虜としてソ連で強制労働に就かされていた60万人とも，それ以上とも言われている日本兵が，帰還後は日本の共産化に尽力するという念書を取られた上で続々と帰還してきていた。日本が「赤化」することを危惧したGHQが，スターリニズム下のソ連を批判したと思われる『動物農場』を出版させたことには，明らかに反共プロパガンダとしての意義が籠められていたであろう。

しかしオーウェルは，社会主義を支持する作家であり，スペイン内戦ではトロツキー派のPOUMの兵士として参戦していたことを思えば，それは皮肉な使われ方でもあった。またイギリスでは，幾つかの出版社が『動物農場』の出版を断っているが，そこには次のようなもっと皮肉な事情があった。

> この時期［1945年頃］のイギリスでは，ソ連にたいする世論の好感，むしろ敬意は最高の高まりを見せていた。ソ連軍がドイツ軍の強襲をほとんど一手に引き受けて戦っていたからである。西欧文明が存続するか否かは，「英雄的なソ連人民」の抵抗力にかかっているかのように思えた。かつてはヒットラーに欺され西欧の信用を失墜していたスターリンが，今では大衆新聞の紙上では「ジョー伯父さん」と呼ばれて敬愛されていた。イギリスの左翼は，ソ連軍の軍事力を生み出したのは社会主義の経済政策と共産党支配の成果であると主張した。右翼はもともとイデオロギーに関心がなかったが，今この時点で同盟国ロシアに対して批判的な発言をすることは「紳士的でない（ノット・ダーン）」ことだと感じていた。『動物農場』は，この親ソ的気運の壁に真正面から衝突したのである。(2)

『動物農場』が寓話形式になっているのも，そうしたイギリスの空気への配慮のためだったかもしれない。しかし，オーウェルにしてみれば，どんな形であれ，ムード的な甘さを持つイギリスの左翼的知識人や国民に，自分がスペイン内戦で洞察したことを伝えたかったであろう。

『動物農場』に働いた政治的力学は，『1984年』にも同じように働いた。『1984年』も日本では「翻訳許可書」として，GHQのお墨付きを得て1950年に翻訳出版され，「自由主義世界」の一員となった新生日本において，反共のプロパガンダ文学として読まれたのである。小池滋は，『オーウェル著作集III』につけた解説「小説家オーウェル」において，日本におけるオーウェルの評価は，こうした「反共小説作家」としての「きわもの的」扱いがされる時期が長く続き，その後忘れ去られたが，次第に

エッセイなどが少しずつ翻訳されるに及んで，ようやく再評価される気運が出てきたと述べている。[3] 本論もその流れに連なるものであるが，『1984年』は，近代社会，近代文明に潜む恐るべきものに焦点をあてた，近代ディストピア文学として位置づけるのが最も的を射た評価になると思われる。

2．3．『1984年』の基本設定

主人公のウィンストン・スミスは，物語の始まる1984年4月現在（彼自身の推定によると）39歳，したがって1945年（ないし 1944年）生まれと考えられる。つまり1948年時点での3歳児が，そこから36年経ったときにどのような社会に住んでいるか，という未来小説の設定になっている。

舞台は，「オセアニア」という国の中の，第3に大きな地域「第一エアストリップ」（かつてのイギリス）の首都「ロンドン」である。この時代，世界は3つの超大国「オセアニア」「ユーラシア」「イースタシア」に分かれている。『1984年』第2部に掲載されているゴールドスタインの解説――実はオブライエンの書いたもの――に従うと，「オセアニア」は，現在の南北アメリカとイギリス，及びオーストラリア・ニュージーランドと南アフリカを加えた，今でいう英語圏であり，「ユーラシア」はポルトガルからベーリング海峡までの，現在のヨーロッパ大陸とロシアを合わせた地域，「イースタシア」は日本を含む東アジア地域で，中国を中心としている。そしてこれらの3大国が互いに戦争を繰り返しながら共存している。ロンドンにも毎日のようにミサイルが飛来している。

ウィンストンは「党員」の1人である。党というのは，イングソック（Ingsoc : English Socialism の略）という名の党で，「オセアニア」はこの党による独裁となっている。党は，「内部党」（Inner Party）と「外部党」（Outer Party）に区分され，「内部党員」が人口の2％の約600万人，「外部党員」が13％の約3,900万人，その他の85％を占める2億5,500万人の人民が，「プロール」（Proles；プロレタリアートの略）と呼ばれる一般民衆である。「内部党員」は黒服，「外部党員」は青いオーバーオールを着ていて外見ではっきりと見分けがつく。「プロール」は人間扱いされておらず，管理された家畜のような存在となっている。「プロール」を管理する実務に携わるのが「外部党員」で，彼らの生活は（「平等」の建前からか）貧しく，かつ「内部党員」から徹底的に監視されている。「内部党員」は何不自由ない生活を送りながら，絶対的な権力を享受している。その一番上に君臨するのが，“Big Brother”という，実在するかどうか確かではない人物で，彼の大きなポスターが至るところに貼られ，そこに“Big Brother Is Watching You.”と書かれている。

党のスローガンは，「戦争は平和，自由は隷従，無知は力」（War is Peace. Freedom is Slavery. Ignorance is Power.）である。「言語」は「ニュースピーク」（New Speak）と呼ばれるものが公用語化されつつあり，旧時代の「英語」は「オールドスピーク」（Old Speak）と呼ばれている。「二分間憎悪」（Two Minutes Hate）という儀式を行うことが毎日党員に義務づけられていて，特にゴールドスタインという「人民の敵」として位置づけられている人物の顔がスクリーンに映し出されると，党員はそれに向かって憎悪を吐き出すよう条件づけられている。

政治は，報道・娯楽・教育・芸術を管掌する「真理省」（Ministry of True ; Minitrue），戦争の「平

和省」(Ministry of Peace ; Minipax)，法と秩序の「愛情省」(Ministry of Love ; Miniluv)，経済の「豊富省」(Ministry of Plenty ; Miniplenty) の 4 省庁によって司られている。

ウィンストンは，「真理省」の記録局に勤務する「外部党員」で，そこから 1 km離れたところにあるビクトリー・マンション (Victory Mansions) の 7 階に住んでいる。1950年代半ば頃粛清があり，それによって母と妹を失い (父はもっと早くに失っている)，10歳か11歳で孤児になっている。1973年 (ウィンストンが27歳頃) にキャサリンという女性と結婚し，15箇月ほど短い同居生活を送ったが，その後別居し11年近くが経つ。ウィンストンは，やがてジュリアという26歳の女性と恋に落ち，反ビッグ・ブラザーということで心を同じくすると思われる内部党員のオブライエンに接近する。

2．4．「最後のヨーロッパ人」メモとの比較

前述した「最後のヨーロッパ人」メモの後半に，レイアウトが次のように記されている。(一部省略；和訳付加)[4]

Part I　divided into abt 6 parts, comprising: (第 1 部　以下の約 6 つの部分から構成)
i . Lies, hatred, cruelty, loneliness. (虚偽，憎悪，残酷さ，孤独)
ii . Pictures of London [?] the swindle of Bakerism. (ロンドン［？］の描写，事実の改竄)
iii. Fantasmagoric effect, rectification, shifting of dates, etc., doubts of own sanity.
(眩暈効果，改訂，年代・日付の変更等，自分の正気に対する疑念)
iv. Position of the proles, etc. (プロールの社会的位置，等)
v . Successful approach to X & Y. (XとYへのアプローチの成功)
vi. Love affair with Y. Conversation with X. (Yとの恋愛，Xとの会話)

Part II　to be divided into 3 main parts comprising: (第 2 部　以下の 3 つの主要部分から構成)
i . The torture & confession (拷問と告白)
ii . Continuation of diary, mentally (日記の続編，精神的な記述)
iii. Recognition of own insanity. (自身の狂気の認識)

次に『1984年』のシノプシスを示す。

《第 1 部》1．ウィンストン (以下Wと略記) の部屋。Wは，(思想警察に捕まる危険を冒して) 日記をつけ始める。昨夜見た戦争映画；今朝11時の「二分間憎悪」についての記憶；黒髪の女 (ジュリア；以下 J と略記) とオブライエン (以下Oと略記) のこと；日記に「ビッグブラザー (以下 B. B.と略記) を倒せ」と書いたところでノックの音。

2．同僚のパーソンズの部屋の配水管修理 (老朽化したビクトリー・マンションの描写)。「スパイ団」に属しているパーソンズの 2 人の子供。誰とも心を通わすことのできない孤独感。

3．明け方，死んだ母と妹の夢；文明を脱ぎ捨てるかのように服を脱いで川に入る女の夢。7 時15分のテレスクリーンの前での「一斉体操」。過去の歴史が抹消されていることの自覚。

4．真理省・記録局でのWの仕事。過去の歴史改竄の作業，存在してもいない人間を捏造する作業。

5．真理省の食堂風景（不味い食事，不潔な環境）。ニュー・スピーク辞典の編集をしているサイムとの会話（公開絞首刑の話，ニュー・スピークの話）。パーソンズとの会話（子供たちの密告のお手柄話）。

6．Wの日記，プロールの街での娼婦買いの記憶。キャサリンとの性生活の破綻。日記で告白することで自分の性衝動を抑えようとする試みの失敗。

7．Wのプロールたちの蜂起への期待。それを裏切るかのような，プロールの女たちによる，不足していた片手鍋の売場での争奪戦。党から見たプロールの飼い殺しの動物としての位置づけ。大粛清の生き残りの指導者たちの記憶――彼らのした告白が捏造によるものであるという証拠を手にした時の記憶を蘇らす。党がなぜ歴史を書き変え続けるのか理解不能なこと。自分の正気に対する疑念。Oを味方として考え，力を得る。自由とは，２＋２が４であると言える自由が第一のものだという認識に至る。

8．プロールの住む街へ出かける。ミサイル弾の爆発。パブで老人に革命前の生活を聞こうとするが，老人の頭は断片的な記憶があるばかりで，要領を得ない。以前日記帳を買った骨董店で，珊瑚が埋め込まれた美しいガラスのペーパー・ウエイトを買う。慎ましい店主（チャリントン）に案内されて，過去のものがあれこれ置かれた二階の部屋に案内され，そこが非常に気に入る。

《第２部》1．「真理省」の廊下で例の黒髪の女（Ｊ）が倒れたので助け起こす。離れ際にメモを手に押し込まれる。後でそのメモを見ると“I love you.”の文字。10数日後，やっと食堂でＪと相席になって，仕事がひけた後，広場で待ち合わせ，日曜日に会うことにする。

2．日曜日，森の中の空地でのＪとの媾曳。自然描写。

3．WとＪの考えの交換。Wは，自分はもう死んでいると諦めているのに対し，Ｊは，党には表向き従って，後は何とかうまくやりおおせることができると考えている。

4．Wは，チャリントンの骨董店の二階の小部屋を借り，そこをＪとの媾曳の場所として使うようになっている。Ｊが砂糖，本物のコーヒー・紅茶を持ってやってくる。Ｊは化粧し，香水をつけてみせる。過去の平凡な幸福な暮らしの感触が蘇ってくる。

5．党がしていることについての，WとＪの考えの相違。Ｊは，Wが憤りを感じていることに関心がない。

6．サイムが蒸発［おそらく粛清されている］。OがWに話しかけ，自分の家に来ないかと誘う。Wは，地下組織「ブラザー同盟」の入口に辿り着いたように思い気分が高揚するが，同時に，墓所に踏み込んだような感じを持つ。

7．Wは夢で，母の夢を見，自分が配給のチョコレートの妹の分まで取って逃げて帰ってくると，母と妹が消えていた日のことを思い出す。横にいるＪにそれについて語るが，Ｊには関心がない。自分たちがつかまって拷問に掛けられれば，互いに相手を裏切るだろうが，愛情だけは彼らもどうすることもできないとWとＪは話し合う。

8．WとＪは連れ立ってOの住居を訪問。《ブラザー同盟》の話。Wは同盟のためなら，いかなることでも行うと誓う。ゴールドスタインの本を近日中に渡すとOが約束する。

9．《憎悪週間》の６日目に，民衆が「ユーラシア」に対する憎悪で狂熱状態にある時，突然「オセアニア」が交戦中なのは「ユーラシア」ではなく「イースタシア」であると発表される。すると民衆も演説者も，ただちに憎悪を「イースタシア」に転ずる。以後，「真理省」では，これまでの全ての文献から「ユーラシア」と交戦していたという記述を変更することに忙殺される。

その仕事からやっと解放されたWは，Oから渡されていた『寡頭制集産主義の理論と実践』という本を読み始める。戦争の性格が変化したということ，支配が巧妙化したことについての叙述。

10．窓の下の洗濯物を干している大きな女をWは美しいと感じ，人類の将来はプロールにあると思う。そ

の時突然，絵の裏に隠してあったテレスクリーンから「お前たちは死んでいる」と声がし，窓から黒服を着た屈強の男たちが侵入してくる。彼らにチャリントンが指示を与える。チャリントンの正体は思想警察であった。Ｊは腹を思いきり殴られ，苦悶に喘ぎながら外に運び出されていく。

《第３部》１．Wは，「愛情省」の中にあると思しき部屋に拘置されている。詩人のアンプルフォース，自分の娘に寝言で「B. B.を倒せ！」と言っているのを盗聴され告発されたパースンズ，それから餓死寸前の男が次々に入室してくる。101号室に何か恐ろしい秘密があるらしい。Oが入室してくる。しかしOも実はB. B.側の人間であった。Oといっしょに入室してきた黒服の男にWは肘を棍棒でしたたかに打たれる。

２．長い期間に亙り散々に暴行と尋問による拷問を加えられた後，Wはベッドに縛りつけられた状態で意識を回復する。傍にはOが立っている。彼がレバーを回せば，(電流か何かで)段階的にWの苦痛を激化させることができるようになっている。OはWに残っている，過去の実在という妄想を治癒しようとする。Oが出した４本の指が何本に見えるか聞かれたWは，最初は４本だと言っていたのが，最終的にはOが言うように，５本あると思えるようになる。

３．Wに加えられる治療は，学習，理解，受容の３段階に分かれていて，第２段階に入る。党がなぜ権力を求めるのかというとそれは権力それ自体のためだ，とOは言う。Oの権力へのオマージュ。党の不滅。鏡で見ると，Wの姿は見るに堪えないほどみすぼらしいものになっている。OはWを「最後の人間」と呼ぶ。WはOの説く，憎悪を基礎にした生への不信を表明し，自分はまだＪへの愛を捨てていない，それだけはOたちもどうすることもできないと抵抗する。

４．その後比較的楽な生活を与えられたWは，自分の心は明け渡したものの，その核の部分はまだ保持していると思い，Ｊへのいっそう強まった愛を確認し，射殺される前に，B. B. を憎悪して死のうと思う。それがOたちの目論見に対する反逆となる，と。Oが入ってきて，WのB. B.に対する憎悪を確認すると101号室行きを指示する。

５．101号室で，Wは，彼の嫌いな大型の肉食ネズミが２匹入った金網製のマスクを顔に被せられようとする。Wは，恐怖のあまり，唯一残っていた取引材料のＪを持ち出し，代わりにＪを使ってくれと，Ｊを心の底から裏切ってしまう。

６．解放されたWは，街のカフェーの奥まった席に座ってビクトリー・ジンを飲む日々を送る。ある日偶然にＪに出逢うが，二人とも変わり果てており，互いの間には冬景色と同じような寒々としたものしかなくなっている。Wは暖かなカフェーに戻り，テレスクリーンから流れてくる「オセアニア」の戦勝の知らせに熱狂し，B. B.を心から頼もしく思い，彼に対する心からの愛を感じる。

こうして比較照合してみると，1943年の構想で出ている要素は，ほとんど『1984年』に組み入れられていることが分かる。1943年の構想のＸはオブライエン，Ｙがジュリアということになる。ジュリアとの恋愛部分が膨らんで，『1984年』の第二部になっているということになろう。

異なっている点は，1943年のメモのPart II- ii で，最初の構想では，日記の形で主人公の心境変化を語らせようとしていたようだが，『1984年』では客観描写になっていて，読者がウィンストンの心の中を想像する趣向に変えられている。

２．５．『1984年』のストーリー展開のダイナミズム

『1984年』の緊迫感あるストーリー展開の力学は，第１部においては，主人公が，党によって掛け

られている条件づけを少しずつ解除していき，「過去」は実際にはどのようであったかを朧げながら知るようになっていく，つまり忘却の状態から過去を思い出す「心の旅路」的な過程に存している。興味深いのは，日記を「書くこと」によってそれが推進されているということで，ウィンストンの日記の文章自体が，最初は書き慣れない稚拙さを感じさせるが，次第に自在を得た文章に上達している。日記を書いたりすることは犯罪行為と見なされているので，そこに「打倒，ビッグ・ブラザー」と書くということは，ウィンストンが退路を断ったことを意味する。蘇る過去は夢の形を取って現れることもある。ウィンストンは，夢に現れた，大粛清で蒸発させられた母と妹の目の中に，過去に生きていた価値観を認める。そして母親が何も与えるものがないときでも病気の妹を抱きしめていた記憶が，映画で見た，子を腕で庇おうとしてヘリコプターからの機銃掃射で撃ち殺されてしまう母子像と重なり，個人と個人の絆がそれだけで価値のあった時代の存在をウィンストンは実感する。

第2部ではウィンストンが，ジュリアとの性愛を通じて，党員には禁じられている自然な欲望に目覚めていく過程が momentum となっている。自然の美しさも彼の目に映るようになる。骨董店で見つけた珊瑚を埋め込んだガラスのペーパーウェイトの美しさに目が留まるのは，彼の眠らされていた審美性が息を吹き返した徴である。そしてただセックスをするためだけではなく，ジュリアといっしょにいたいという願望を持つようになったウィンストンは，骨董店の二階の小部屋を借りてそこを二人の愛の巣にしようとする。そこで，本物のコーヒーや紅茶，サッカリンではない砂糖，そして化粧に香水と，過去の事物に触れることによって，ウィンストンは好きな時に愛し合い，好きな時に話し，起きなくてはいけないという強迫観念抜きで，外から聞えてくる平和な物音に耳を澄ませるという，当たり前の生活がかつては存在していたということに気づき始める。そして窓の外で洗濯物を干しながら歌を歌っている女を見て，プロールたちの中には自分たちの中では失われてしまっているそうした価値観や人間性がまだ残っているという認識に導かれるのである。

第3部では，そのように覚醒したウィンストンの堅固な信念を，オブライエンが尋問と拷問によって打ち砕いて行くストーリーが息もつかせぬように展開する。『カラマーゾフ兄弟』の「大審問官」の部分とよく比較される，息詰るような応酬の末に，ウィンストンは完全に敗北し，ビッグ・ブラザーを愛しながら，（おそらく）後頭部を銃で撃ち抜かれるのである。

3.「全体主義」の分析

『1984年』は，「全体主義」を批判した小説ということになっている。ここでは，所謂「全体主義」のどこが批判されているのか，そして，別稿「管理・監視社会における『自由』と『平等』」で検討したように，現代の民主主義社会，自由主義社会でも同じことがあり得るのではないかという視点から検討してみたい。

3．1． 全体主義批判（1)：情報統制／歴史の改竄

「オセアニア」の情報管理は徹底している。マス・メディアはどうやらテレスクリーン１つだけのようで，それが「党」によって完全に支配されている。「党」から民衆に流される情報は，その時々で都合に合わせて変えられる。しかしそれを咎め立てする者はいない。というのは，「真理省」において――まさにそれがウィンストンの仕事の一部であるのだが――過去の歴史を，現在に合わせてすべて書き換えるからである。オブライエンの所説によれば，「過去」は実在するものではなく，人間の記憶認識の中にしか存在しないのであるから，「絶対無謬」の党が，「過去はこうであった」と言えば，過去はそのようになるのであり，異説や批判は許されないというより，そもそも存在し得ないのである。

こうした「オセアニア」の情報操作は，戯画化されて描かれているために荒唐無稽にも感じられようが，実はそうではない。スターリン体制下のソ連において現実に起こっていたことをオーウェルは下敷きにしているからである。しかしその点については，民主主義国においても大同小異であって，どの国も，自国の犯した醜悪なことや卑劣なことは，都合に合わせて歴史から抹消してきたのである。

また歴史以外のことについても，適切な統計的処理を行えば，政府にとって都合の悪い状況であっても，たいていはうまく糊塗できるものだ。そうした糊塗の技術が政治になっている気味すらある。

3．2． 全体主義批判（2)：言語統制

「オセアニア」では，伝統的な英語をオールド・スピークと呼び，それに対して新しい言語体系を作ろうとしている。語彙の徹底的な削減（bad をなくして ungood とするなど）と，品詞間の融通の増強（speak という動詞を名詞に転用して New Speak とするなど）が特色で，その目的は，人民の思考を制限することにある。freedom という言葉から抽象的な意味を抜いてしまえば，思想の自由などといった「思考犯罪」も起こらなくなる。語彙を削減すれば，人間の思考範囲は狭まる。justice という言葉がなければ，「不正」という気持ちは起きない。その結果，御しやすい国民ができ上がる。

体制を批判できる能力を国民に与えるような教育を工夫する殊勝な政権は古来おそらく存在しないであろうから，これも民主主義国に該当する。現在の日本の教育における語彙の削減は顕著な特質で，若者の多くは，抽象概念を表す語彙が驚くほど貧弱化しており，また隠喩や機知やアイロニー表現に対する感受力が劣化している。思考能力を奪うもう１つのよい方法は，暗記に精力を消耗させることで，これは日本のみならず，他の国々でも励行され成功を収めている。膨大な量の学習事項を従順に暗記しないかぎり「偏差値」が上がらないような教育システムが確立している。

3．3． 全体主義批判（3)：「二重思考」

「オセアニア」では，頭の一方でこれは戦争だと思っても，頭の他方ではこれは平和だと思うことができる“doublethink”が国民に刷り込まれている。党のスローガンの War is Peace. という完全な論理矛盾も，“doublethink”が出来れば，問題なく受け入れられる。国民がこの思考習性を身につけていてくれれば，権力側としてはこれほどやりやすいことはないだろう。

これは,「建前」と「本音」の二分法にも通じることであり，現代の日本社会においては社会常識のようなものにすらなっていて,「大人」であることと「二重思考」能力はどこかで重なっている。

3．4． 全体主義批判（4)：監視

『1984年』の中で使われている注目すべきテクノロジーが,「テレスクリーン」であろう。テレビは1936年には実用段階に入っていたが，一般家庭への普及という意味ではまだまだであった。「テレスクリーン」は，すでに双方向性を加えており，現在の Skype に似た機能を有している。こちらから監視者は見えないのだが,向うからは映像と音声を送ると同時に,こちらの映像と音声を四六時中モニターすることができる。「テレスクリーン」の背後で常に監視者がこちらを見ているとは限らないのだが,いつでも見ることができるという可能性によって，常に見られているいのではないかという緊張が生じる。それは，ベンサム／フーコーの「パノプティコン」概念によく合致する。監獄社会である。

党がマークした人間に対する監視は徹底したもので，ウィンストンの日記は盗み見られ，いたるところで盗聴と盗撮が行われる。ウィンストンがオブライエンと語ったこともすべて録音されているし，ジュリアとの愛の交歓の模様も録画されている。骨董店も罠であって，過去のモノの美しさに惹かれるような危険な兆候を示す党員をおびき寄せるネズミ捕り的装置になっている。

監視の可能性ということでは，現在の民主主義国の方が進んでいるかもしれない。現在の日本では監視カメラに録画されることなく街は歩けないし，電話は盗聴され得るし，電子メールは公開しているも同然，逃亡しても顔認識や衛星で追跡される。オサマ・ビン・ラディン殺害の一部始終はホワイトハウスに実況中継された。

3．5． 全体主義批判（5)：密告／拷問／粛清

『1984年』では，1950年代半ば頃第一次粛清があり，1960年代半ばに大粛清があったという設定になっている。旧ソ連社会で現実に存在した，スパイ，密告，秘密警察，逮捕，拷問，(見せしめ)裁判，強制収容所，処刑というテロルの制度がモデルとなっているとされる。ゲシュタポを想起させる箇所もある。ナチスの犠牲者は数百万人と言われ，旧ソ連の犠牲者も同じくらい多いと言われている。これは闇組織で取り入れられている制度を表の世界で採用したものに他ならない。別稿「管理・監視社会における『自由』と『平等』」で述べたように,「平等」という女神を figurehead にすると，その国家は「自由」を扼殺するほかはなくなり，恐怖政治に陥りやすい。しかも一度粛清を行えば，怨みによる報復を怖れなければならず，一層深い猜疑心の虜となって，粛清を重ねるようになる。

『1984年』を読むと，人は拷問によって，友人や恋人をいかに簡単に裏切るようになるか，信念だとか愛だとかをいかに脆く捨ててしまうかが十分納得できるほど,その拷問の描写には迫真性があり,恐怖が伝染してくる。日本国憲法の「生命，自由及び幸福追求に対する国民の権利」(13条）と「拷問と残虐な刑罰の絶対の禁止」(36条)によって，現在の日本では国による拷問は表立っては行われていない。しかし学校での陰湿ないじめや DV などを考えると，憲法のタガが外れてしまえば，たちまち

元の木阿弥になりかねない危うさが感じられる。

3．6． 全体主義批判（6)：労働者階級の奴隷化

『1984年』において，労働者階級はプロールと呼ばれ，党は，一方では，旧時代の資本家階級から徹頭徹尾搾取され奴隷状態に陥っていた彼らを自分たちが解放したのだとしているが，「二重思考」によって他方では，プロールを動物同然に見なし，労働と子供を産むだけのために服従させておかなければならないと党員たちに教育している。

「オセアニア」の階級組織で工夫してあることは，プロールの生活が，「外部党員」の生活に比べれば多少いいと思えるようになっていることで，庶民は常にテレスクリーンに監視されているわけでもなければ，性生活の快楽を禁じられているわけでもない。しかしながらその生活は，まるで家畜のそれで，労働を提供し，次世代のプロールを生産し，安っぽい娯楽に興じ，労働力として役立たなくなった頃に死ぬように仕組まれている。

現在のわれわれ大衆の人生も，家畜車を思わせるすし詰め電車で職場に通い，サービス残業をさせられ，安酒に酔い痴れ，テレビのお笑い番組にうつつを抜かし，最後に病院のベッドで，年金を浪費せぬようなるべく早く死ぬのを待たれる人生であり，思えばプロールの人生そのものである。

3．7． 全体主義批判（7)：「性」の抑圧

『1984年』の「オセアニア」では，党以外に対する忠誠心が，男女間の結びつきによって弱められることを防止するために，性に快楽を求めることは禁止されており，唯一性交が認められるのは，党に忠誠を尽くす子孫を産み出すためである。したがって，党では人工授精による出産も考えつつある。なおこれは党員に対する対策であって，プロールに対するものではない。プロールは貧しく，売春もかなり行われており，またプロールの慰撫対策として，安っぽいポルノが「真理省」で量産され，送り込まれている。

ウィンストンがキャサリンと別居するに至ったのも，キャサリンがセックスを拒む一方で，子供を産むためのセックスを，日を決めてウィンストンに強要するのが最大の理由であった。

党が，党に対する忠誠心が弱まるのを防ぐために性を抑圧するのは，カトリシズムの性の抑圧を思わせる。抑圧はヒステリーとなって表れ，それが憎悪の燃料として利用されている。そしてプロールの性生活は，現代庶民のそれとあまり変わっていないように思われる。

3．8． 全体主義批判（8)：憎悪／戦争／原爆

「二分間憎悪」や「憎悪週間」での儀式は，個の中に潜在させている憎悪を，集団的ヒステリーによって誘発させるためのものである。ウィンストンが理性的に抵抗しようとしても，集団による同調圧力によって，暴力的な憎悪に抗しきれなくなり，彼は後ろに座っているジュリアにその憎悪を振り向ける。憎悪が何か他のものに転嫁可能な情動であることが巧みに描かれている。

The horrible thing about the Two Minutes Hate was not that one was obliged to act a part, but that it was impossible to avoid joining in. Within thirty seconds any pretense was always unnecessary. A hideous ecstasy of fear and vindictiveness, a desire to kill, to torture, to smash faces in with a sledge hammer, seemed to flow through the whole group of people like an electric current, turning one even against one's will into a grimacing, screaming lunatic. And yet the rage that one felt was an abstract, undirected emotion which could be switched from one another like the flame of a blowlamp. …（中略）… It was even possible, at moments, to switch one's hatred this way or that by a voluntary act. Suddenly, by the sort of violent effort with which one wretches one's head away from the pillow in a nightmare, Winston succeeded in transferring his hatred from the face on the screen to the dark-haired girl behind him. Vivid, beautiful hallucinations flashed through his mind. He would flog her to death with a rubber truncheon. He would tie her naked to a stake and shoot her full of arrows like Saint Sebastian. He would ravish her and cut her throat at the moment of climax. (pp.16–17)

恐怖から来る憎しみを，集団催眠を利用して敵に振り向け，性的な抑圧を残忍さに転化するところは，軍隊の訓練を思わせる。ウィンストンが昨日見た映画でも，観客は残忍な描写に拍手喝采する。

『1984年』では「オセアニア」「ユーラシア」「イースタシア」の３超大国が，互いに絶えず戦争を行なっており，そのことが経済を支え，かつ民衆の憎悪を持続させている。

各国は原爆を持ち，1950年代に核戦争をして，その後どの国も，他の２国を一挙に打ち負かすことはできないと分かったため，通常兵器による戦争を行ないつつ，他の２国を壊滅させるに足るだけの原爆の増産と備蓄に努めている。

オーウェルは実際に，世界の国々のこうした３つの超大国への合併・吸収と，核兵器による三竦み状態の継続を予想していた。その予想は外れているが，冷戦期の代理戦争や相手国への憎悪，経済の戦争に対する依存ということでは当たっている。周知のように，現在の安保理常任理事国は最大の武器輸出国グループになっている。

４．『1984年』の relevance と限界

上に見たように，現代の民主主義国家は，ほとんどの点で『1984年』的状況に陥る，ないしすでに陥っている危険性があることが分かる。この章では，別の視点から『1984年』の現代に対する relevance を検証すると同時に，その限界を提示しておきたい。

４．１． 原爆

オーウェルに，「あなたと原爆」（1945年10月19日）というエッセイがあり，そこに『1984年』の設定と似通った記述がある。また兵器というメディアと政治形態との相関に注目しているのは鋭い洞察となっている。しかし同時にこのエッセイは，彼の原爆に対する考えの限界をはっきりと示している。（ソ連が原爆開発に成功したのが1949年８月29日であり，『1984年』の出版時にはまだアメリカの原爆

の独占が続いていた時代で，情報不足はやむを得ない面があった。)第一に，原爆は 3 つの国にしか作れないほど難しいものではなく，原料さえ確保すれば比較的簡単に作れ，現在までに推計 9 カ国が保有している。第 2 に，核の保有によって，小国の吸収合併が進むというのは間違った予想となった。そして第 3 に，放射能による原爆症の恐ろしさが意識されておらず，何よりも原爆が非倫理的な兵器で，これを所持したり使用したりすると，正常なモラルが保てなくなるという肝腎なことに触れられていない。規模の大きな爆弾という認識にとどまっている。

4．2． 全体主義と民主主義

原爆の問題と相関するが，メディアの肥大化によって，社会のあり方に変化が生じる。新聞，電話，無線，鉄道，自動車，飛行機，ラジオ，テレビといった，広大な地域を結びつけることのできる強力なメディアは，国家の力を飛躍的に増大させた。そしてその力を遠慮なく揮えば，ファシズムやコミュニズムという「全体主義的」な統治が可能となった。しかし別稿「管理・監視社会における『自由』と『平等』」で指摘したように，全体主義を民主主義と対立する概念として捉えるのは十分な理解とは言えない。歴史上のドイツや日本のファシズム，ソ連や中国のコミュニズムが蛮行を行ったのは事実だが，それは非民主主義国であったためではない。強くなりすぎた国家権力は，民主主義国家，自由主義経済においても，個人に対して濫用され得るし，また現に濫用されている。権力機構が既得権益化してしまうと――たとえばアメリカの軍産複合体，日本の政官財の癒着を見てみればよかろう――全体主義と同じ，ないし，笑顔を浮かべながらこっそり蛮行を働くもっと悪質な社会になり得る。

そういう意味で，『1984年』は，全体主義の恐怖を描いた作品と解釈するよりは，巨大化した国家権力が非力な個人にどのような抑圧と危害を与え得るかということを描いた作品として見たほうが，今日的 relevance を持たせ得るであろう。オーウェルの念頭にあったのは言うまでもなく，「全体主義」の恐怖であっただろうから，今後は，「民主主義国家のディストピア」をより具体的に描き，警鐘を鳴らすような文学が必要となろう。

4．3． オブライエン的人物

『1984年』のオブライエンは，悪魔的人物の文学的造形として秀逸である。ウィンストンは，オブライエンが党側の人間であるということが分かった後でも，彼に対する奇妙な親愛感を示している。それはオブライエンが，ウィンストンの感じることや考えることすべてを理解できるからである。

拘置されているウィンストンのところにオブライエンが来た時，ウィンストンが誤解して，「あなたも捕まったのですか？」と聞くと，「私が捕まったのはずっと昔だがね」と言っていることから察するに，オブライエンはかつてウィンストンと同じような考えを抱いて思想警察に捕まり，拷問によって「改心」させられ，通常なら粛清されるところを，異端の改宗役として使えると考えた B. B. の配慮で無期的に生かされているのだろうか，彼の表情に刻まれている深い疲労は，そうした何らかの裏事情を感じさせる。彼がウィンストンに告げる次のことは，地獄を思わせるが，地獄における永遠の生

は，オブライエン自身の心境を密かに籠めて語られたものかもしれない。

Do not imagine that you will save yourself, Winston, however completely you surrender to us. No one who has once gone astray is ever spared. And even if we choose to let you live out the natural term of your life, still you would never escape from us. What happens to you here is forever. Understand that in advance. We shall crush you down to the point from which there is no coming back, if you lived a thousand years. Never again will you be capable of ordinary human feeling. Everything will be dead inside you. Never again will you be capable of love, or friendship, or joy of living, or laughter, or curiosity, or courage, or integrity. You will be hollow. We shall squeeze you empty, and then we shall fill you with ourselves. (pp. 268-269)

「うつろな人間」――『1984年』最後のウィンストンの姿は，まさにそれを表しているが，それは非現実ではなく，心の底からこの世の虚無を知った人間のポートレートという意味で，現代に通じている。ウィンストンはすぐに射殺されるからいいようなものの，オブライエンは，地獄における永遠の生を生き続けなければならないのである。

4.4.「愛」と「権力」

ではオブライエンを生かし続けている秘薬は何かと言えば，彼自身が認めているように「権力」（power）である。『1984年』の第3部は，「愛」の信徒ウィンストンと「権力」の信徒オブライエンの争いになっている。なぜ人は権力を求めるのかという問いに，オブライエンは，ウィンストンが予想したような，人民のためという，聞き飽きたおためごかしは言わない。オブライエンは自明なことを言わねばならない疲れた表情でウィンストンに率直に語って聞かせる――人が権力を求めるのは，権力それ自身のためである，自分に権力があると実感できるのは，その権力によって人々が苦しむのを眺めている時である，と。そこまで純化され意識化された権力は，愛をも滅ぼすことが可能となる。そしてそれは，普遍的真実であるがゆえに，現代の民主主義にも適用できないわけがないし，現にそうなっているように思われる。

4.5. 庶民への期待

オーウェルは，エッセイ「イギリス人」(1947) において，外国人観光客が看過してしまいがちなイギリス人民衆の一般的特性を論じているが，その中に，少しユーモラスに書いてはいるものの，オーウェルの民衆（労働者階級）への信頼感を窺わせる部分がある。オーウェルがある北部の炭坑町にいたときに，ドイツ軍がライン河を渡ったというニュースをラジオで聴き，たまたま入ったパブで人々にそれを告げるが，彼らから何の反応も得られず，オーウェルはその鈍感さに匙を投げる。しかし夕方同じパブに行くと，誰かが，“For you can’t do that there ’ere, / No, you can’t do that there ’ere; / Anywhere else you can do that there, / But you can’t do that there ’ere” というコーラス

のついた歌を歌っていた。オーウェルは，それがイギリス庶民のファシズムに対する答えなのだと悟るのである。

ピューリタニズムにせよファシズムにせよ共産主義にせよ，狂熱と“kill-joy”を感じさせるものに対する本能的な不信というのは，確かに「イギリス的」と言えるのかもしれない。しかしオーウェルの自国民に対する観察には，今日の目から見ると，やはり一定の甘さが認められる。『1984年』の中の，労働者階級に希望を託するような次の有名な一節にも，やはり詩的な夢想の響きがある。

The birds sang, the proles sang, the Party did not sing. All round the world, in London and New York, in Africa and Brazil, and in the mysterious, forbidden lands beyond the frontiers, in the streets of Paris and Berlin, in the villages of the endless Russian plain, in the bazaars of China and Japan－everywhere stood the same solid unconquerable figure, made monstrous by work and childbearing, toiling from birth to death and still singing. Out of those mighty loins a race of conscious beings must one day come. You were the dead, theirs was the future. But you could share in that future if you kept alive the mind as they kept alive the body, and passed on the secret doctrine that two plus two make four.

オーウェルは上流階級を嫌っていた。上流階級や中産階級の上層部の人間は，何と言っても既得権益者であるから，現状を改革した将来を描かせるには適任ではない。そうなると下層中産階級と労働者階級を合わせた庶民階級以外には希望の託しどころがない。しかし「プロレタリア革命」を起こしたところで，20世紀のおぞましい歴史の二の舞いになることは分かり切った話である。かといって「新自由主義」という名の，形を変えたブルジョワ独裁ではどうしようもないとしたら，われわれの取り得る道は自ずと限られてくるように思われる。

１つの鍵は，『1984年』に描かれた権力の恐ろしさを意識化し，社会の共通認識にすることである。ヒロシマのミッションに同行した記者のローレンスは，機中で，今安らかに眠っている何十万の日本人の生死の運命を自分たちが握っていることに神のような力を感じ，気分を高揚させているが，それこそが，荒野でイエスを誘惑したサタンが提出した取引条件の１つであった。人類の将来が懸かっていると言ってもよい，この権力欲の社会的な処理を果たしてどうすればよいのか――『1984年』はそういう大きな問いかけをなしているように思われる。

もう１つの鍵は，オーウェルが強調している，庶民が持っている“decency”（人間として恥ずかしくない《まっとうさ》）を社会の中心に据えることができるかどうかということである。そしてdecency を持った人々に，マズローの基底的な欲望の自由と平等が保障されるような社会を真の民主主義となし，そういう民主主義を支えてくれる力を文明の新しい定義となすことができるかどうかである。

４．６． 言論の自由，権力批判の自由

上記の文化的努力は，言論の自由，自由な権力批判ができるかどうかということが絶対的な前提に

なる。この自由がなければ，社会は変革の原動力を封じられ，権力は必然的に腐敗し，病的なものに変質していく。『1984年』の「オセアニア」では言論の自由，権力批判は一切認められていない。人民の敵とされているゴールドスタインの方が，「言論の自由，報道の自由，集会の自由，思想の自由」（第１部―１）を訴えているのである。２＋２＝４であると言えない社会――それは現在の日本であると言ってもあながち笑い飛ばすことができないのではないだろうか。

５．ディストピア文学の系譜の中で

５．１．『タイムマシン』（*The Time Machine*, 1895）

H. G. ウェルズ（H. G. Wells, 1866-1946）の『タイムマシン』は，近代ディストピア小説の最初期の作品の１つである。舞台は，ロンドン郊外のリッチモンドで，“Time Traveller”という，名前の与えられていない主人公が，西暦802,701年の未来と，さらに３千万年以上先の未来を，「タイムマシン」によって訪問する物語である。

その頃のヒューマノイド（亜人間）は，地上に住む「イーロイ」（the Eloi）と地下に住む「モーロック」（the Morlocks）に二大別され，この二人種は奇妙な共生関係を結んでいる。「イーロイ」は「モーロック」によって食糧と衣服を供給されるが，「モーロック」は時おり，「イーロイ」を捕まえてその肉を食べる。つまり，「イーロイ」は「モーロック」にとっての食用牛になっているのだ。

「イーロイ」は小人で，美しい衣装に身を包んでいるが，知的には愚鈍である。「モーロック」はやはり小人で，地下生活をしているため，肌が気味の悪い白さを持ち，光を嫌う。

“Time Traveller”の推論によると，19世紀で言えば，「イーロイ」は中産階級を，「モーロック」は下層労働者階級を遠い祖先としている。ウェルズがこれを書いた 19世紀末のイギリスは，世界の工場としてのイギリスの最盛期で，福祉も社会にほとんど根づいていなかったために，下層労働者階級の生活は悲惨なものであった。そこから社会主義思想が生まれて来るわけで，ウェルズも一時所属していたフェビアン協会も主要な社会主義思想団体の１つであり，漸進的に社会をよくしていかなければならないという信念を持っていた。

しかし皮肉なことに，この小説では，フェビアン協会で夢見られているユートピアが達成され，中産階級は富と安楽を，労働者はまずまずの生活を保障されると，そこから人間の衰退が始まっている。人間の多面的な知的能力は，生活上の変化，危険，困難によって磨かれるのであり，環境と完全に調和してしまうと，美しいがひ弱な人間と，機械的に生産活動をする人間に退化していき，それがいつか経済的破綻を来して，上述の異常な共生関係へと流れ着いたのである。平和な人間の純真な美しさとはかなさは，“Time Traveller”の恋人となった女性によく現れている。

そうした知的活動が停止してしまった社会では過去の文化遺産が顧みられることもなく打ち捨てられ，本もぼろぼろに朽ち果てつつある。さらにそこから千万年単位で時が進むと，十分予想されるように，人間は絶滅し，この地上から姿を消している。

『タイムマシン』を読むと，人類もその文化も，永遠に続くものではなく，いつかは死滅するという啓示に改めて目を開かされる。やがては死滅する運命にあるという視点から人間社会を見つめ直してみると，自ずと考え方に差が出てくるであろう。

5．2．『われら』(*We*, 1924)

エヴゲーニイ・ザミャーチン（Yevgeny Zamyatin, 1884-1937）の『われら』は，1920-21年に執筆された，ロシア革命が官僚主義化し個人の自由を圧殺することの危惧を感じて書かれた小説である。舞台は26世紀の未来，二百年戦争の後に建国された「単一国」は，千年に亙り異端分子を粛清してきた歴史を持つ。国民には全員番号が割り振られ(主人公はD-503)，ノルマが課せられる。すべての国民の会話は浮遊する監視機によって記録され，ビルはガラス張りでカーテンはなく，あらゆる行動が衆人環視の下に置かれる。プライバシーが持てる時間は１日２時間に制限され，性交は「ピンクカード」の配給により決められた相手と行われ，その時だけはカーテンの使用が許可される。文化や娯楽はなく，義務に従うことが至上の幸福とされている。自由は野蛮人のもので，自由を持とうとする人間は病気と診断され，「想像力摘出手術」が施される。国境は「緑の壁」によって封鎖され，「恩人」（レーニンがモデルとされる）は「野蛮な自由」を持つ敵から国民を守っている。選挙制度はあるが，投票日は「全員一致デー」と呼ばれ，国民全員が「恩人」に対して賛成を示す義務が課されている。しかしある年，「全員一致デー」に反対を示す女性が主人公の前に現れる。主人公はその女性に対する恋愛感情と義務の狭間で葛藤する。

『われら』は『すばらしい新世界』にも『1984年』にも影響を与えている。特に，科学テクノロジーを用いた監視装置，「想像力摘出手術」といった人間改造，恋愛による人間性の回復といったモチーフは，『1984年』と共通している。

5．3．『すばらしい新世界』(*Brave New World*, 1932)

アルダス・ハックスリー（Aldous Huxley, 1894-1963）の『すばらしい新世界』は，科学の発達と合理的な管理によって人々の幸福感を達成しても，それが問題を抱えた社会であることを，ジョンという「野蛮人居留地」で育った青年の目で見ることによって浮き彫りにしている。

この社会では，人間は人工授精によってビンの中で，予め階級が決められて生まれ，家庭はなく，すべての子どもは教場での「徳育」によってその階級での生活に満足できるように育てられる。１日７時間半の労働を果たせば，後は無制限のフリーセックス，触感映画（映像で起こっていることを感覚的に感じられるヴァーチャル映画)，ゲームによる自由時間を享楽でき，万一鬱状態に襲われても，「ソーマ」という薬でそれを簡単に解消できる。老年による肉体・精神の劣化はなくなっており，青年の心と身体が持続する。

「総統」のムスタファ・モンドは，『われら』の「恩人」とは違って，「ものわかりのいい」管理者で，ちょっと社会の norm からずれてしまったような人間は，粛清するのではなく，そういう人間同士

を一箇所にまとめて，その孤立した世界の中で幸せに暮らしてもらうという寛容さを持っている。『1984年』が剛の全体主義だとすれば，『すばらしい新世界』は柔の管理社会で，この両作品を合わせ鏡のように用いれば，管理・監視社会と個人の自由の問題が，よりよく透視できるであろう。

5．4．『華氏451度』（*Fahrenheit 451*，1953）

レイ・ブラッドベリ（Ray Bradbury, 1920-2012）の『華氏451度』は，テレビの発達により，圧倒的なヴァーチャル感覚が得られるようになった時代において，人々はもっぱらテレビによって自由時間を楽しく過ごすようになり，書物を読む人間が疎ましい存在となり，伝統的古典はことごとく禁書指定となり，所持していると摘発されて焚書が行われる。主人公のガイ・モンターグは，その焚書係をしていたが，好奇心から，燃やされる本の山からこっそり１冊を抜き取っては自分の家に秘かにコレクションを作っていた。

そして書物の素晴らしさに気づき始めたモンターグは，本を隠し持っていることが分っているフェイバーという老教授を訪問し，彼に本の価値は何かと尋ねる。フェイバーはこれに答えて３点を挙げる――１）本は，事物の表面ではなく，内部にある本質を教えてくれる，２）テレビの映像と異なり，それについて考えることで，事物の本質を消化できる，３）そうして獲得された知識は，正しい行動に結びつけることができる。

しかしモンターグは，署長のビーティーに追いつめられたため，焚書用の火炎放射器でビーティーを焼き殺して逃走し，流民の群れに合流する。彼らこそ，本なき世界に，各自が１冊の本を正確に記憶し，次の世代に伝えていこうとする人々の集団であった。

現代では各種メディアの発達によって，本の凋落に歯止めがかからないが，本というメディアがいかに人間性と密接な関係を有しているか，また人間の記憶力というものが，原初的な自然メディアであって，その記憶力の拡張として本が存在するということを再認識させてくれる。

5．5．ディストピア文学の系譜における『1984年』の位置づけ

エーリッヒ・フロム（Erich Fromm, 1900-1980）は，『1984年』につけた“Afterword”（1961）において[5]，トマス・モア（Thomas More, 1478-1535）の『ユートピア』（*Utopia*, 1516），トンマーゾ・カンパネッラ（Tommaso Campanella, 1568-1639）の『太陽の都』（*La città del Sole*, 1602），ヨハネス・アンドレーエ（Johannes Andreae, 1586-1654）の『クリスティアノポリス』（*Christianopolis*, 1619）が，ルネサンスを以て勃興を始めた西洋近世の「ユートピア三部作」だとすれば，ザミャーチンの『われら』，ハックスリーの『すばらしい新世界』，オーウェルの『1984年』が西洋近代末を表象する「ディストピア三部作」だという。ユートピア文学は三部作以後，19世紀末まで西洋で書き継がれてきた。しかし西洋社会が理想の社会に向かって進歩していっているという夢と希望は，第一次世界大戦で打ち砕かれ，1930代のドイツの野蛮化，スターリン体制の狂気，そして第二次大戦の非人道的な空爆や原爆投下によって，西洋文明は，人類の文明自体を破壊しかねない絶望のムードへと変質

していったとフロムは言う。『1984年』は，その絶望のムードを最もよく表しているディストピア文学と言ってもいいように思われる。他のディストピア文学は，それでもまだ心的余裕や諧謔を感じさせるところがあるが，『1984年』には，ずっと切迫した何かが感じられる。それは，オーウェルの病気（結核）も絡んでいた可能性がある。こうした宿痾は，都市や軍隊や交通といった，人間の生み出したメディアの不自然な過剰によって広まる。（第一次大戦時のスペイン風邪は，軍隊が格好の媒体となった。）こうした大きな構図で見れば，オーウェル自身が，「文明」の trespass に対する自然からの報復的却罰を背負わされたとも言えるわけで，病の苦しみは，遠く原罪の暗さと響き合うものを負っていたことになろう。

6．まとめ

『1984年』は，ケストラーの『真昼の暗黒』と同様の，スターリニズムの暗黒を描いた文学というふうに蹋蹐させるべきではない。むしろもう少し大きな視野から，現代の民主主義国家にも適用できる，国家権力と個人の問題をテーマとした，自由，平等，民主主義，文明といったことについての考えを触発する，《近代》批判の古典としての文学として見るほうが発展性に富む。

文明という概念が，いつの間にか科学テクノロジーに偏向して使われるようになってきているが，それはわれわれ自身が機械化してしまっていることの現れでもある。文明概念に人間のよいところが籠められるようなパラダイム・シフトは，やはり文学が先鞭をつけるべき仕事ではなかろうか。

『1984年』をディストピア小説の系譜に置いてみると，個人性，自由，プライバシー，社会的絆，平等，正義，恋愛，性，さらには自然，美，私的なモノ――そして最後に愛――が，人間性を保証してくれるものとして，人間社会の至宝として，戦って獲得・保持しなければならないものであると主張する，西洋文学において連綿と発せられてきた声の１つであることがよく分かる。そして社会情報学的観点からすると，２＋２＝４であるという自明のことを表現できる表現の自由，情報の自由ということが，それらを支えていく貴重な社会的インフラであることを，説得力のある声で伝えてくれているところに，『1984年』の今日的な意義があるのだと思われる。

（原稿提出　平成23年９月７日
修正原稿提出　平成23年11月９日）

―注―

(1) ピーター・デイヴィソン（編）『ジョージ・オーウェル日記』（白水社，2010）p. 456.

(2) 河合秀和『ジョージ・オーウェル』（学習院大学，1995）p. 334.

(3) 『オーウェル著作集III 1943-1945』（平凡社，1970）pp. 395-396.

(4) B. クリック『ジョージ・オーウェル――ひとつの生き方――』下巻（岩波書店，1983）pp. 360-361.

(5) *1984*（Penguin Books, 1983）pp. 280-292.